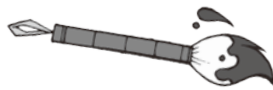


新・下野市風土記

天平のパンデミック



下野市教育委員会 文化財課

節分が過ぎた頃から、新型コロナウイルスの脅威に見舞われ、卒業式・入学式をはじめ、別れを惜しむ惜別の会や新しい出会いの歓迎の会なども叶わない春となりました。パンデミックやクラスター感染などという、非日常的で、フィクションの世界で目にするような用語がメディアで使われています。

小学6年生で日本の歴史を学ぶとき、天平13(741)年の国分寺の建立と15(743)年の東大寺の大仏造立については、必ず学習します。しかし、これらが、なぜ造られたのかを問われたとき、答えをきちんと記憶されている方は、かなり少ないように感じられます。

実は、国分寺建立と大仏造立の背景には、天平時代のパンデミックがあったと言われています。今回は、そのときのことをお話しします。

星の動きと災厄の影

天平13年から遡ること6年前の天平7年5月4日の夜、天の星の多くが入り乱れ、通常的位置になかったと『続日本紀』に記録されています。

この頃、他にも災害や異変がしきりに起こっていました。「災厄がたくさん起こるのは、天皇として自身の徳が足りないことによるものだ」として、聖武天皇が恩赦の実施や、宮中と四大寺(大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺)で大般若経の転読をするよう命じますが、事態はおさまらず、8月2日には金星と水星が異常接近し、12日には、大宰府管内で疫病により死亡するものが多い、という報告が届きます。

聖武天皇は、疫病治癒のために大宰府管内の神社に捧げものをし、観世音寺と九州の諸寺に読経をさせました。23日には疫病のため、その年の調の貢納(税金の納付)を停止しました。

閏11月1日に起こった日蝕を受け、17日には大赦が行われました。

現代のような科学的な知識がない中、星や太陽などの天文が乱れることは、人々の不安をまねきました。特に、日中にも関わらず空が暗くなる日蝕は、「杞憂」という言葉の由来となった故事のように、天が落ち、地が割れるほどの衝撃を人々に与えたことでしょう。

聖武天皇は、災いを逃れようと都の移動を転々と繰り返しましたが、天平8(736)年7月には平城宮に戻りました。天皇の伯母にあたる太上天皇(先の元正天皇)の容態も思わしくなく、太上天皇の病氣平癒のため、100人を僧として得度させ、四大寺で7日間の行道をするよう指示しています。

収まらない脅威

天平9(737)年4月、大宰府管内の諸国で多くの人々が疫病にかかり、命を落としました。17日には、参議・民部卿正三位の藤原房前(藤原不比等の次男)が亡くなりました。

5月1日に再度、日蝕が起きました。僧侶600人を宮中に招いて大般若経転読を行い、19日には聖武天皇が詔を出して恩赦を行いました。疫病の勢いは衰えず、6月1日には諸官司の役人の大半が疫病にかかって朝廷の執務が中止されてしまいました。11日には、大宰府の次官で歌人でもある小野朝臣老が亡くなっています。

7月13日には参議・兵部卿従三位藤原朝臣麻呂(不比等の第4子)が、25日には左大臣正一位の武智麻呂(不比等の長男)が死亡。8月5日には不比等の第3子の宇合が死亡し、重職を担っていた藤原不比等の子どもたちが相次いで亡くなったことで、政治機能が一時停止したと考えられています。

8月13日には、全国の租(税)が免除されました。15日には、国家安寧を願って宮中で700人の僧による大般若経・最勝王経の読経を行って、400人を新たに得度させました。さらに、畿内4か国、七道の諸国でも578人を得度させました。

あらゆる手を尽くしても、疫病の勢いを止めることはできず、当時の総人口の25~35%にあたる100~150万人が亡くなったといわれています。

この疫病は、唐や渤海、新羅に派遣されていた使節が海外から持ち込んだものだとされています。4月に大宰府に上陸したものが、6月には平城京、7月には長門・大和・伊賀・駿河・伊豆・若狭の諸国でパンデミックを引き起こし、高級官僚から庶民まで身分の分け隔てなく、多くの人々の命を奪ったのです。